

機関番号： 32620

研究種目：基盤研究 (C)

研究期間：2009～2011

課題番号：21520279

研究課題名 (和文) スレイヴ・ナラティブにおける家族と母性の研究

研究課題名 (英文) Family and Motherhood in Nineteenth-Century Women's Slave Narratives

研究代表者

宮津 多美子 (TAMIKO MIYATSU)

順天堂大学・医療看護学部・講師

研究者番号：60509660

研究成果の概要 (和文)：19 世紀のスレイヴ・ナラティブ (奴隷体験記) 研究ではフレデリック・ダグラス等、主に奴隷自ら執筆した男性ナラティブが中心だったが、この研究では自己執筆だけでなく、口述筆記された女性ナラティブを研究対象とした。家族の離散や性的搾取、母性の否定等、娘、母、妻として作者／口述者が描写した女性特有の奴隷体験から反奴隷制のメッセージを読み取り、主に同性読者である北部白人女性への心理的・社会的影響を論じた。

研究成果の概要 (英文)：The research into nineteenth-century slave narratives has mainly focused on several self-written narratives by men such as Frederick Douglass and William Wells Brown; in contrast, my project covers women's narratives, both self-written and orally-narrated. My research explores broken ties of families, sexual exploitation, and denials of motherhood, recorded from women's points of view as daughters, mothers, wives in slave families. Features particular to women's narratives on their experience as slaves include abolitionist messages by which white readers, especially women, were morally and socially inspired to take action in the antebellum North.

交付決定額

(金額単位：円)

|         | 直接経費      | 間接経費    | 合計        |
|---------|-----------|---------|-----------|
| 2009 年度 | 500,000   | 150,000 | 650,000   |
| 2010 年度 | 300,000   | 90,000  | 390,000   |
| 2011 年度 | 300,000   | 90,000  | 390,000   |
| 年度      |           |         |           |
| 年度      |           |         |           |
| 総計      | 1,100,000 | 330,000 | 1,430,000 |

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：英米・英語圏文学

キーワード：米文学、スレイヴ・ナラティブ、奴隷体験記、黒人、マミー、ジゼベル、母性

## 1. 研究開始当初の背景

黒人家族と黒人女性像について

これまでアフリカ系アメリカ人 (以下「黒人」という) の家族については歴史的にさまざま「偏見」や「神話」が流布してきた。20 世紀半ばにはいわゆる「モイニハン・レポート」(“The Negro Family: The Case For National Action,” 1965) が黒人の未婚率・

離婚率の高さ、一人親家庭の多さ、主たる家計保持者の不就労、生活保護への過剰な依存等、黒人家族をめぐる諸問題を指摘した。その原因が彼らの民族性にあるかのような誤解を与えたこの報告書は、白人が持つ黒人への人種的偏見を露呈している。たしかに黒人は奴隷制下、日常的に行われる「売買」によって家族は離散し、家族の枠組みが形骸化し

ていたことは事実である。しかし、そのような中でも売られた母親に代わって奴隷共同体が集団的に子供を養育し彼らに民族的な伝統を伝えていたこと、また、彼らが逃亡・追跡等によって「家族」と再会を果たしていたこと等、黒人の家族観が白人と異なるものではなかったことが研究によって明らかにされている (*The Black Family in Slavery and Freedom 1750-1925*, Herbert G. Gutman, 1976)。

また、20世紀後半には、黒人家族に関する問題も、実際には職業における人種差別とそれを原因とする貧困に関連があること、そしてこれらの問題の原因は彼ら自身の民族的背景や文化的価値観とは無関係であることが別の社会学者によって指摘された。このように黒人家族はさまざまな社会的・歴史的偏見により、白人の理想的な家族像と対極のイメージを与えられてきた。

また、19世紀の「マミー」「ジゼベル」といったステレオタイプの黒人女性像も白人(男性)から押しつけられたものであると Deborah Gray White は指摘している。黒人女性は、白人家庭に住み込み、乳母として家族から絶対的な信頼を集め献身的に尽くす、南部奴隷制を起源とする「マミー」か、そうでなければ性的に放埒で男性を誘惑する悪女「ジゼベル」であるというイメージはどちらも女性を性的に搾取したものであるとされる。前者からは「性」を奪い、後者には過剰な「性」を押しつけることにより、どちらのタイプも自ら制御可能な存在としているからである。

現代に見られるこれらの黒人家族像、黒人女性像はともに19世紀奴隷制下での人種的イデオロギーに基づくものである。

### スレイヴ・ナラティブについて

スレイヴ・ナラティブ(奴隷体験記)は、公的記録以外是一次資料としての信頼性はないという考えから、長く「文学」「フィクション」として歴史家から無視されてきた。その一方で、奴隷主の手による歴史的文書(記録、手記等)は正当な資料として扱われてきた。歴史家は奴隷主の文書に真実を、奴隷の文書に虚偽を見出そうとしてきた。しかしながら、1970年代以降、多文化・多民族理解への動きの中、スレイヴ・ナラティブは歴史的証言としての価値が認められるようになり、文学研究者だけでなく歴史家からも研究対象の文書とみなされるようになった。

奴隷制においては、奴隷への教育は法律で禁じられていたために出版されたナラティブの多くが白人による著作(口述筆記)である。しかも、これらのナラティブはほとんどが男性によるものである。

19世紀スレイヴ・ナラティブ研究においても、奴隷制廃止前(1865年まで)に個別に

発行された約65(～80)作品の約9割を占める男性ナラティブが主な対象となっている。中でも Frederick Douglass、William Wells Brown ら、後に奴隷制度廃止論者や活動家として著名となった男性の自己執筆ナラティブが中心であった。

女性ナラティブ研究に関しては、20世紀末、Jean Fagan Yellin の Harriet Jacobs 研究をきっかけに Jacobs だけでなく、Elizabeth Keckley 等のナラティブ研究がなされてきたものの、こちらでも識字能力をもった作者による自己執筆ナラティブが中心である。しかしながら、南北戦争前の奴隷の識字率は深南部諸州では1割以下といわれることから、奴隷の大多数が読み書きできない「文盲」であったと考えられる。このような社会的背景から読み書きができる女性奴隷は例外的な存在であったといわざるを得ない。

よって、男性の、しかも自己執筆によるナラティブ中心の研究では、読み書きのできなかった大多数の奴隷女性の声をすくいとることはできない。男性ナラティブと異なり、女性ナラティブには精神的・肉体的暴力だけでなく、性的暴力に対する苦悩、母性の否定等、女性特有のテーマも綴られている。男性作者も女性特有の苦悩について語っているものの、彼らは「産む性」として奴隷人口の再生産を強いられた女性特有の奴隷体験を正確に描いているとはいえない。一部の作品については家族や母性、セクシュアリティに関する研究がなされているが、概して口述筆記の女性ナラティブに関しては十分な研究がなされているとはいえない。

## 2. 研究の目的

19世紀奴隷制下で出版されたスレイヴ・ナラティブ、特に女性によるナラティブには奴隷制に起因する女性特有の苦しみが綴られている。家族、出産、育児に関わる苦悩である。本研究ではこれら女性のスレイヴ・ナラティブを取り上げ、奴隷制が黒人の家族関係をいかに変容させ、黒人女性を性的に搾取したかについて検証する。

特に、白人の精神的・肉体的暴力の中で変容した母性や家族関係、セクシュアリティの問題を扱い、女性がこれらの記憶をどのように描いたかに注目する。奴隷主によって「家族」が恣意的に離散を強いられ、家族という枠組みそのものが形骸化していく中で、母や娘であるナラティブの著者がこれらの「負の記憶」をどのように後世に伝えようとしたかという、奴隷制の歴史化のプロセスに注目する。

この研究ではアメリカ奴隷制下における女性特有の奴隷体験の全体像を把握するため、女性のスレイヴ・ナラティブを対象とし、自己執筆だけでなく、白人もしくは黒人筆記

者・編集者による口述筆記ナラティブをも含めることとした。口述筆記の場合、筆記者や執筆者、編集者ら奴隷制廃止論者の内容への介入が問題視されてきたことから、これら筆記者のヴォイスと女性のヴォイスを区別しながら女性の奴隷体験を取り上げる。自己執筆・口述筆記双方のナラティブを扱うことで識字能力を得るといった特権的な立場にはなかった女性奴隷の記憶を検証することができる。現在入手可能な女性スレイヴ・ナラティブから、奴隷女性の記憶を全体的な奴隷制の歴史の中でとらえ直したい。

## 2. 研究の方法

「産む性」としての女性、そして、奴隷制において特定される唯一の親（奴隷の出生記録には通常父親名は記載されない）という観点から、ナラティブに綴られた女性の「家族」に関わる苦悩を読み解く。また、彼女たちが語る奴隷制の記録（記憶）がいかんにして構成され伝えられたのか検証する。

本研究では、主に 1865 年奴隷制廃止までに出版された女性ナラティブを扱う。自身がペンをもち書き残した作品だけでなく、識字の問題から白人の手によって口述筆記されたものも加えて研究対象とする。口述筆記されたテキストには時に筆者である白人（女性・男性）の視点が混在することがあるが、可能な限りこれらを排除し、黒人女性の観点から内容を検証する。

女性のスレイヴ・ナラティブにおいて女性（母親）がどのような内容を自身の問題として語り、その経験をいかに記録し伝えようとしたのかという点に注目しながら女性の奴隷制の「記憶」とその歴史化のプロセスを読み解く。

平成 21 年度は「母性愛とその変容」、平成 22 年度は「家族的価値観のアフリカの伝統」、平成 23 年度は奴隷制の「奴隷制の暴力と『記憶』の歴史化」をテーマに奴隷女性の声をすくい取る。対象とするのは以下の作品である。

- 1) Wilson, Harriet E. Adams. *Our Nig; or Sketches from the Life of a Free Black, In a Two-Story White House, North.* (1859) \*小説として扱われることもある。
- 2) Brent, Linda (Harriet A. Jacobs). *Incidents in the Life of a Slave Girl; Written by Herself.* (1861)
- 3) Spear, Chloe. *Memoir of Chloe Spear, a Native of Africa, Who Was Enslaved In Childhood. By a "Lady of Boston."* (1832)
- 4) Truth, Sojourner. *Narrative of Sojourner Truth, a Northern Slave, Emancipated from Bodily Servitude by the State of New York in 1828. Narrated to Olive Gilbert.* (1850)

- 5) Williams, Sally. *Aunt Sally; or The Cross the Way to Freedom. Narrative of the Life and Purchase of the Mother of Revered Issac Williams of Detroit, Michigan.* (1858)
- 6) Brown, Jane. *Narrative of the Life of Jane Brown and Her Two Children. Related to the Reverend G. W. Offley.* (1860)
- 7) Craft, William and Ellen. *Running a Thousand Miles for Freedom, or the Escaped of William and Ellen Craft from Slavery.* (1860)

上記の女性スレイヴ・ナラティブのテキストを家族・母性という観点から精読し、口述者・筆記者に関する情報、社会的背景・思想等を踏まえて内容を検証し、ナラティブにおける反奴隷制のメッセージを探る。19 世紀南北戦争前のアメリカ社会における奴隷制賛否の議論、ジェンダーに関するイデオロギー、当時の人々の人種観についても調べ、それら社会的要素のテキストへの影響を考察する。

## 4. 研究成果

### (1) 平成 21 年度

19 世紀に発行された（元）奴隷によるスレイヴ・ナラティブは、1830 年代、奴隷制廃止運動の高まりとともに、奴隷制の残酷さや非情さを告発する手段として奴隷制廃止論者たちに利用されるようになる。約 9 割を占める男性作者によるナラティブと比較すると、女性によるナラティブは政治的なメッセージよりも家族関係や恋愛・出産・育児、日常生活での葛藤といった内面の描写を詳細に記述しているのが特徴といえる。これは女性によるナラティブが（主に北部の）白人中産階級の女性を読者に想定していたことと関係がある。妻・母としての思い、出産・育児に関する苦しみなど、同性の読者に向けたメッセージに思いを託したと考えられる。

平成 21 年度は、1850 年に発行された元奴隷から福音伝道師・社会改革者となった Sojourner Truth の *Narrative of Sojourner Truth* を中心に研究を行った。これは白人女性の友人 (Olive Gilbert および Frances Titus) によって口述筆記されたものであり、奴隷女性というより福音伝道師という立場で語られたものであることから、他の女性ナラティブとは異なり、家族関係や心理的葛藤に関しては詳細に語られていない。しかしながら、奴隷制を糾弾する男性的ナラティブとも異なっている。ナラティブにおいて Truth は、家族の絆や個人的葛藤といった私的側面より、奴隷制廃止論者、伝道者としての公的側面を強調している。これは、個人的「母性」より民族的な意味での「母性」の尊重であるとも解釈できる。その後、キリスト教の教え

を基盤としながらも、弱者保護のための幅広い社会改革（奴隷制廃止、禁酒、死刑廃止、女性参政権）に関わったことから、Truth が同胞（黒人および女性）に対して民族的・ジェンダー的な使命感を抱いていたことがうかがわれる。

一方で、奴隷の母親でもあった Truth の、公的イメージからの「家族」の消去はおそらく「意図的」であったと考えられる。強制された結婚相手である年上の夫との関係、奴隷制廃止の移行措置として一定期間の奉公を義務付けられた娘たちとの関係、3つの社会主義的共同体での疑似家族的集団生活等についても触れながら Truth の家族観・母性についてさらに掘り下げていきたい。

Truth の他にも、論じられることの少なかった女性によるスレイヴ・ナラティブを取り上げ、そこに描かれた家族や母性の問題について考察する。

## (2) 平成 22 年度

平成22年度は男女のナラティブの語りの違いに注目した。元奴隷女性によるスレイヴ・ナラティブでは、Frederick Douglassや Josiah Hensonなどの黒人男性によるナラティブとは異なる視点で奴隷体験が語られている。奴隷女性の描写について、男性作者は目撃者の立場からより悲劇的かつ客観的に、女性作者は当事者の立場からより肯定的かつ主観的に語る傾向が認められる。さらに、女性ナラティブでは奴隷主の非道さや個人的な能力や自己実現の過程より、母性や家族に関わる精神的な苦悩とその克服への意志が強調されている。そこには彼女らが信仰心や自尊心を支えに性的搾取や家族の別離に向きあい、それらの試練を乗り越えようとする姿が描き出されている。

平成22年度はこれまで研究してきた Sojourner Truthに加え、Sally Williams、Harriet Jacobs（筆名Linda Brent）、Elizabeth Keckley等、南北戦争をはさむ1840～1860年代の女性ナラティブを取り上げ、女性たちが強調した家族的価値観について研究成果をまとめた。このうち、Truth、Williams の作品は口述筆記によるもの、Jacobs、Keckleyの作品は自己執筆によるものである。これらの作品には、女性や母親の視点での奴隷制の苦悩が読み取れる。家畜同様に繁殖させられ売り買いされる奴隷の母親や、白人奴隷主の情婦として20年もの間、毎年妊娠・出産を繰り返し弱って死んでいく女性、混血児を産み、憎しみの中で生後間もないわが子に手をかける女性の描写もある。女性ナラティブが訴えるのは奴隷制の中で否定される母性や家族の絆である。

ナラティブの中で、女性は突然ふりかかる性的暴力の恐怖や売買され連れられる子供への思いを語った／綴った。しかしながら、ナラティブではこれらの体験は悲劇というより試練として肯定的に語り直されて読者に提示される。このように、女性ナラティブは、男性が描いた奴隷制の記録や証言とは異なるものであり、女性は男性とは異なる奴隷制を生きなければならなかった事実を示すものである。

本年度は、さらに南北戦争直後に発行された Harriet Tubman のナラティブについても研究を行った。奴隷制下、「地下鉄道」（逃亡奴隷の支援組織）で活躍した女性奴隷 Tubman の人生や思想について考察した。

今後の研究でも南北戦争後の女性によるナラティブを含めて検討し、家族や母性の描写が戦前のナラティブとどのように異なるのかといった点を、戦後の社会情勢や世論の変化と併せて明らかにしながら、奴隷制の記憶の歴史化プロセスについて考察する。

## (3) 平成 23 年度

本課題では主に 19 世紀中葉までに発行された黒人女性によるスレイヴ・ナラティブを扱い、それらの作品における家族や母性の描写をテーマに研究してきた。これらの作品には、売買による家族離散、奴隷所有者の道徳的墮落、キリスト教信仰および人間性の主張など、男性ナラティブにも見られるテーマの他、女性ナラティブに特徴的なジェンダーに関わる奴隷体験も含まれている。ナラティブには性的暴力や奴隷主の強制による妊娠・出産経験が、時に自分に嫉妬する女主人の描写とともに、直接的な被害者の視点から描かれている。これらの女性「性」に対する暴力は同じ母・妻である白人女性読者が共感できるテーマであることから、ナラティブ作者・口述者である黒人女性はこの点を強調しながら読者である北部白人女性に人種を超えた女性の連携を訴えかけたと考えられる。

読者である白人女性らは奴隷制に苦しむ黒人女性のメッセージを受け取り、奴隷制廃止運動に関わるようになる。さらに、白人女性は編集者・筆者として女性スレイヴ・ナラティブ出版に関わったことも知られている。このように、女性奴隷の記憶は白人の姉妹らによって歴史化され、現代に伝えられている。

今年度は、昨年度に続き、男女のナラティブのヴォイスを比較するため、北部から誘拐されて奴隷になり、その後救出された自由黒人 Solomon Northup の奴隷体験記を研究したが、この中で自由人と奴隷の境界線という新たな論点を見出した。今後、自由人（市民）と奴隷を分けた南北戦争期の社会規範・法律・慣習・制度、黒人の識字能力の獲得をめ

ぐる議論等についても研究していきたい。

本課題で対象とした口述筆記された女性ナラティブには、男性ナラティブ同様、奴隷廃止論者である白人のヴォイスの挿入が散見され、時に奴隷女性の声より前面に押し出されることがある。しかしながら、これら白人編集者・口述筆記者の存在なくしては、奴隷女性の、しかも識字能力がなかった多くの奴隷女性の声は後世に伝わることはなかった。当時、書き言葉を持たなかったアフリカ諸国から強制移動を強いられた彼らの口承伝統の文化（オーラル・トラディション）という観点からも口述筆記のナラティブは研究対象として意味があると考えられる。

平成 23 年度は研究期間の最終年度に当たることから成果の統合を行ってきたが、女性ナラティブに関する研究成果の発表は果たせなかった。今後、母性、家族の絆、ジェンダー特有の奴隷体験等、女性奴隷制の記憶の歴史化について、統合した形での研究成果の発表にむけて準備したい。

本課題の3年間の研究では、19世紀における自己執筆および口述筆記された女性スレイヴ・ナラティブ研究を深化させるところまでは至っていない。今後も女性ナラティブの研究を続けることで、黒人女性が残した奴隷制の記憶・記録への学術的関心を喚起していきたい。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計5件)

- ① 宮津多美子、悲劇から試練へ：スレイヴ・ナラティブにおける女たちの主体的記憶、順天堂大学医療看護研究、査読有、7巻1号、2011、10-20
- ② 宮津多美子、黛道子、中村安子、アメリカン・デモクラシーの現実を目指して：19世紀改革期のパイオニア女性、査読有、順天堂大学医療看護研究、7巻1号、2011、21-34
- ③ 宮津多美子、闘うヒューマニスト：アメリカの偶像としてのハリエット・タブマン、査読無、津田塾大学言語文化研究所報、26号、2011、45-55
- ④ 宮津多美子、黒人伝道師の社会改革：ソジャーナー・トルース『ソジャーナー・トルースの物語』、査読有、アメリカ文学にみる女性改革者たち、彩流社、2010、115-37

- ⑤ 宮津多美子、歴史化されるソジャーナー・トルース伝説：行動する福音伝道師の生涯の記録、査読無、津田塾大学言語文化研究所報、24号、2009、54-63

[学会発表] (計2件)

- ① 宮津多美子、自由黒人Solomon Northupの奴隷体験記*Twelve Years a Slave*における絶望のモチーフ、日本アメリカ文学会東北支部3月例会、東北大学、2012. 3. 3
- ② 宮津多美子、義務と孤独：ハリエット・タブマンの神話と実像、津田塾大学言語文化研究所、津田塾大学、2010. 9. 19

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

宮津多美子 (TAMIKO MIYATSU)  
順天堂大学・医療看護学部・講師  
研究者番号：605966